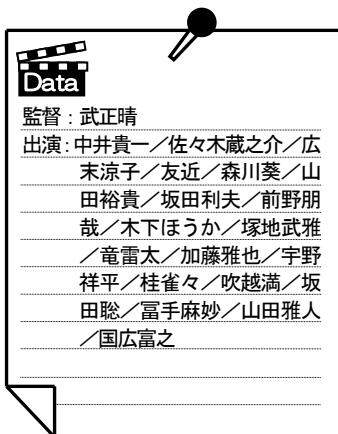




■■ショートコメント■■

◆ロ達者な詐欺師・小池則夫役の中井貴一と、うだつの上がない陶芸家・野田佐輔役の佐々木蔵之介が共演。その意外な「組み合わせの妙」によって、『嘘八百』（17年）がヒットした（『シネマ41』72頁）ため、すかさずその第2弾が！

第1作の騙しのネタが千利休の幻の茶器なら、第2作のそれは武将茶人・古田織部の幻の茶器に設定。そして、第2作では、第1作では不要としていたマドンナを登場させた。それが、京の着物美人・橘志野（広末涼子）だが、当然『嘘八百』シリーズのマドンナは、『寅さん』シリーズのマドンナとは異質の、詐欺師まがいの設定に・・・？

◆本作のチラシには、「まさかまさかの続編！！あの〈骨董コンビ〉が帰ってくる！！」「あの〈骨董コンビ〉再び。幻の古田織部の茶器でひと助け！！」「俺たちに女難の相だって！？哀しき京美人を救え！『嘘八百』がスケールも招福度もドーンとパワーアップ！！」のフレーズが躍っている。

◆また、公式ホームページによれば、本作のストーリーは次のとおりだ。

今作の舞台はお宝が眠る古都・京都。注目のお宝は、千利休の茶の湯の後継者で「天下一」と称された武将茶人【古田織部】の幻の茶器。人気漫画でもお馴染み、「へうげもの」（ひょうきん者）と呼ばれた【古田織部】の茶器の魅力は“歪み”と“疵”。どこを掲けても絵になる美しい古都を背景に、歪みまくって疵だらけ、だけどどこか憎めない個性豊かな人間たちが、騙し騙されの化かし合いを繰り返す。クライマックスは国の名勝・渉成園で開かれる華やかな大茶会。幻の茶器のお披露目を、TVのお宝番組で生放送するという前代未聞の大仕掛けだ。コンゲーム参加者が大集結する、スケールアップしたお祭り立てで、想像を超える鮮やかな逆転劇を楽しませてくれる！

まあ、これだけ読めば、本作は観たも同然・・・？

◆私は、星4つをつけた『嘘八百』の評論のラストに「付録は蛇足？それとも世代交代は不可欠？」の見出しで「今や日本の中小企業の多くは後継者不足で事業を廃止しなければならない状況に陥っているが、それは詐欺師も同じ」と書いたうえで、「小池も野田も後継者不足（ナシ？）で悩んでいたはずだが、本作のあっと驚くラストのドタバタ劇を見ると、なるほどこれもあり？」と書いた。

しかして、「まさかの続編！！」ができるなら、その主人公は世代交代した2代目になるのが本来の筋だが・・・。

◆しかし、『ロッキー』シリーズがシリーズ第7作目の『クリード チャンプを継ぐ男』（15年）になるまで、なかなか“世代交代”できなかった（『シネマ 37』27頁）のと同じように、『嘘八百』シリーズもやはり中井貴一と佐々木蔵之介の二枚看板でなければムリ。たしかに、小池の娘・大原いまり（森川葵）や野田の息子・野田誠治（前野朋哉）の存在感（の弱さ）を見れば、それはそうだろう。しかし、第1作と同じ武正晴監督によるあの“骨董コンビ”が帰ってきても、同じような設定、同じような騙し、同じようなドタバタ劇では長期シリーズ化は到底ムリ。本作ラストでは、「ひょっとして第3作も・・・？」という期待がミエミエだが、それは第2作がヒットするか否かにかかっている。

そのようにシビアに考えると、シリーズ第3作は多分ムリ・・・？

2020（令和2）年2月27日記